若者と敬語表現

金子泰子

目次

要旨
一　はじめに
二　若者にとって敬語とは
1　学生の声
2　若者の言語環境
三　いわゆる「敬語の乱れ」について
1　意識のずれ
2　社会構造と敬語表現
四　使い分けの問題点
1　待遇表現の中の敬語
2　敬語の分類と問題点
イ　尊敬語
ロ　謙譲語
ハ　丁寧語
ニ　美化語
3　相対敬語
五　敬語表現の指導を考える
1　家庭・学校・社会
2　今後の指導のために
六　おわりに

要旨

若者が敬語表現に対して感じる難しさは、指導者や年配者の想像を超えるもののようである。語彙や語形的な知識不足もさることながら、むしろ対人関係に応じての使い分けの難しさが一番の問題点である。

敬語は文字通り解釈すれば「敬意を表すことば」となるが、現実には、目上の人に限らず、初対面の人や自分に恩恵を与えてくれる人など、あらたまって特別な認識をした人に対して用いられる表現である。敬語ということばにとらわれることなく、待遇表現の中の一部分として、他の敬語でない語との対応関係の中に位置づけて敬語表現を指導することが学習者の理解を促すことにつながる。

「です」「ます」に関しては、たんに丁寧語として教えるのでは不十分である。尊敬語や謙譲語が話題の人物・事物に対して特別な認識を持って待遇しようとする表現であるのに対して、丁寧語は話題の人物・事物には関わりなく、聞き手に対して直接的に配慮をする表現であることをきちんと区別して理解させることが重要である。

敬語表現は基本的に、話し手が自分を取り囲む人間関係をどのように把握するかにかかっているので、その基本的な部分についての指導も忘れてはならない。日本人のものの考え方についての正しい理解が、敬語表現を使い分ける力につながっていく。

流ちょうに敬語を使いこなす能力は実社会にでて経験を積んでからの課題であろうが、知識の整理は学校の国語教育の場でもっとしっかり行うべき課題であろう。

一　はじめに

「国語」や「国文法」の時間に、日常無意識に使って生活している日本語の中で、何が一番難しいかと学生に尋ねてみると、「敬語」という答えが返ってくる。日常、何不自由なく使っている日本語なのに、今さらなぜ「国語」や「国文法」を勉強するのかという学生が多い中で、「敬語」に対する関心の強さは、指導者を圧倒するほどである。

やっかいで使いにくいからいっそ無くなってしまえばいいのにという学生がいる一方で、大多数の学生は、どうも日本の社会では「敬語」なしでは過ごせないらしいと、敏感に感じとっている。

まもなく社会人になろうとする二十歳前後の学生を悩ませる日本語の中の「敬語表現」の問題点はどこにあるのか、そしてその指導法はどうあるべきなのかを学生の作文(注1)を手がかりに探りたい。

二　若者にとって敬語とは

1　学生の声

辞書や文法学者による敬語の定義を吟味する前に、学生が日ごろ敬語に対して抱いている考え方を紹介しよう。

・めったに使わないので使い方がわからない。バイト先では丁寧に話しているつもりだが、どうも敬語とはかけ離れた奇妙な言葉遣いになってしまう。「○○さんがお呼びでございます」などと呼びかけられれば「ありがとうございざる」などと言いかねない。敬語は社会に出て身についていないと困るのに、私に身についているのは「こっけい語」なのである。

・どういう時、どんな人に、どのように使えばいいのか考えてしまうことがある。バイト先で年上の人と話すとき、あまり親しくない人にはもちろん敬語を使うが、仲良くなった人に敬語を使うのは私の感覚としては失礼だと思うのである。自分の仲のいい年下の子に話しているとき、敬語を使われた場合は嫌な感じはしないが、なんだかよそよそしいというか、相手は自分に心を開いてないと思ってしまうからだ。

・敬語を使うことが少ないので、自分の間違いも人の間違いも指摘できない。大人は子供に対して言葉遣いが悪いと言うけれど、その前に間違いを直してくれればと思う。

・普段はほとんど敬語を使うことがない。「お父さん」「お母さん」と人前で言うとき、「父」「母」というべきなのだけれども、使い慣れていないせいか、逆に使うと恥ずかしかったりする。

・人が敬語を話しているのを聞くときは自然に聞こえるのに、自分が話すとやけに不自然なような気がする。それが正しいのか間違っているのかの判断がつかない。

・先生のおっしゃったことを先輩に伝えるとか、先輩同士の連絡の中継になるとか、敬語が重なるときなどは、緊張も加わって頭が

パニックになる。

・使い慣れないから、使うときはいつでも「です」「ます」という敬語の部分だけ声が小さくなる。だから自分としては敬語を使っているつもりでも、相手にするとぐにゃぐにゃ言っているかタメ口（注2）にしか聞こえないようだ。使い慣れないから「恥ずかしい」という気もちがする。

・敬語ははっきり言ってわからない。わからないから使えないし、好きになれない。「古典」の授業では寒気がするほど敬語が沢山でてきたが、必死でやったら何とか理解できた。理解したらとても楽しく勉強ができた。

・小さい頃、祖父や祖母と一緒にいることが多かったため、自然と敬語について教えられた気がする。

・手紙を書く場合にはまわりの人に聞いたり調べたりできるけれど、電話の場合はその場で答えなければならないのでとても困る。あせればあせるほど意味不明なことを言ってしまい恥をかく。敬語を勉強しようと思っても、なかなかそういう場が無くて長い間困っていた。

・親しい人と話をする場合、敬語を使ったりすると一歩おいてしまった感じになるし、敬語を使わないと気安すぎるような感じもしてしまい、こういうときどういう敬語を使えばよいのかわからない。

・別に敬語なんて使わなくても、自分らしいことばで表現することができれば私はそれでもいいと思う。

・バイト先で職場の人から話しかけられても、敬語がすぐに思い浮かばなかったために、答えたくても答えられなくて、とても残念な思いをしたことがある。

・バイトをしているときに迷う。五歳の子供に「ありがとうございました」というのか、「ありがとね」と言うのか。

・親しい先輩と話すとき、どこまで敬語を使えばいいか迷う。敬語はよそよそしくさせるから。

・たとえ敬う気もちがあっても、その場ですぐにつかえなくては、自分の思いを表すことができないので、やはり勉強すべきである。

・時と場合によって使い分ける「敬語」は、洋服のようでとてもおしゃれだけれど、使いこなすのは難しい。

その他、およその意見をまとめると次のような項目になる。

◎尊敬語、謙譲語、丁寧語の区別が付かない。

◎文末に「です」「ます」をつけることと、相手に関する物事に「お」をつけることしかできない。

◎目上の人や尊敬すべき人に使うのが正しいのだろうが、よそよそしさが苦になって使いづらい。（敬意と親愛の情が敬語表現の中で相いれない）

◎敬語を使うべき人物が、同じ会話の中に何人かでてきた場合にどのように敬語を使い分ければよいのかわからない。

◎面と向かって話す場合は、行動である程度ごまかせるが、電話のように相手が見えない場合には正確な敬語が使えなくて困る。

◎方言は失礼なことばづかいなので、敬語表現の場合は使わない方がよいと思う。

◎十分な学習の場と実践の場がない。

2　若者の言語環境

大学生になってアルバイトを始める学生が多い。高校まで、家庭と学校だけで生きてきた学生が初めて広い世界に出るのである。それまでは、サークル活動で、せいぜい一、二年の差の先輩、後輩間で使っていた敬語を初めて外の世界で実践するのである。

祖父母と同居していて、小さな頃から敬語を使い慣れ（父母が祖父母に対して使うのを聞き慣れ）ていたり、両親（あるいはどちらか一方）がことばのしつけに特にきびしかったという学生が、大学入試の面接や入学後の実習先にかける依頼の電話などで苦労しないですんだという話を聞く。しかし、このような学生は百人に数人がいいところで、大多数は核家族化の中で、敬語などとは全く無縁に成長してきている。二の1で紹介した学生の声からも明らかなように、敬語を話す機会が極端に少なく、「父」「母」というような初歩的な敬語表現でさえも使うのが恥ずかしいと感じるほどである。

小学校から大学まで、日本の子供たちは、空間的にも言語環境的にも非常に狭い世界にいるといえないだろうか。気持ちさえあれば、形式的なことはいずれ社会にでてから経験を積めばよいとも考えられるが、それにしても、学生たちの声からは、言いたいことがあっても言えずに苦しい思いをする様子が見えるようで、かわいそうですらある。

現在の子供をとりまく家庭や学校での言語環境の中では、敬語表現は全くといってよいほど消えてしまっている。その一方、実社会では、商業敬語を筆頭にむしろていねいさの度合いが高まる一方である。アルバイト先で接客用語を暗唱させられて敬語になじんだという一方で、ひとたびマニュアルで示された以外の質問が客から出された場合には全くお手上げで、日ごろのタメ口（注2）が思わず口をついて出てしかられたという経験を持つ学生が多い。

「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」「恐れ入ります」「ご注文は何になさいますか」「またお越し下さいませ」などの非常に敬意の高い敬語の世界と「うん、そうだよ」「また来いよな」「なんにするう」「じゃあな」などのごく親しい友だち同士の、いってみればぞんざいな表現との落差がはげしく、自分でも当惑するようである。

三　いわゆる「敬語の乱れ」について

1　意識のずれ

年配者が若者に向かってことばづかいの乱れを指摘するのは昔から行われてきたことである。「敬語」に限って考えても例外ではない。というよりも、社会構造の変化にともなって、ことばづかいの中でも、もっとも大きく変化したのが敬語表現であるとするならば、年配者による「若者の敬語の乱れ」の意識はさらに強いものとなるであろう。かつての身分階級制度は完全に崩壊し、民主主義と自由主義経済の下で、若者の敬譲の意識は極端に薄れている。薄れるというよりも、そういう意識を起こすほど人間的に親密なつきあいをすることのない世の中であるといった方が正しいのだろう。

人間関係を基盤に使い分けのなされる敬語表現で、社会経験の少ない若者が、敬語を使いこなせないのは当然といえば当然なのである。そして逆に、現代よりも親密な人間関係のもとで社会生活が営まれていた時代に育ち、社会経験も豊富な年配者の敬語表現に対する意識が、現在の若者のことばづかいになじめないのも当然なのである。

この点に関しては、田中章夫が昭和四十四年当時に既に次のように述べている。（注3）

言語の伝達機能から見れば、いわば二次的な現象である敬語の機能が、能率を重んじる現代社会に適応していく以上、そこには自ら限界がある。

むしろ現代の社会は、敬語に対して節度を求めているとみるべきであろう。これを従来の規範に照らして「敬語の乱れ」ときめつけるところに、「今の敬語は乱れている」という論議が起こるもっとも大きな原因があると、わたくしは考える。

基本的に敬語に対する意識の異なる者が集まって社会生活を営んでいるのである。問題が生じないのが不思議と言える。

もしも、かつての敬語表現を復活させたいと考えるのならば、そのような言語表現が自然に現れるような環境と場面そのものを復活させる必要がある。そしてそれが不可能であるなら、今の時代にふさわしい敬語表現の規範を追求しなければならない。

若者が自己主張ばかりふりかざして、年上の者に対等意識で、敬語抜きの会話で話しかけてくる態度に我慢ができないという意見をよく聞くが、学生の言い分に耳を貸してみると、敬語を意識的に抜くのではなく、敬語表現そのものが身についていないからそうならざるを得ないというのが実状なのである。語彙がない、使い分けの知識もない、家庭でも学校でも正しく教えられる機会がない。併せてそれらを使う場面もないというのが現在の若者の置かれた位置なのである。

意識のずれは時代差と同時に個人差においても強く現れる。同じ時代に生きた者の中でも、育った環境や学歴、職種、性別などの要因で敬語に対する意識は大きく異なる。

さらに言及するならば、会話場面での、そのときどきの心理的な人間関係によっても影響されるのである。

個々の表現の誤りを取り立てて問題にするよりも、敬語の位置づけをしっかりと行い、各人それぞれが、おのおのの立場で敬語表現を考えることのできる状態に導くことが重要であろう。

2　社会構造と敬語表現

渡辺友左は「社会変化と敬語行動の標準」（注4）で次のように述べている。

昭和三十年代から始まった全国的な産業化・都市化の進展は、村や町、それに伝統型都市の地域社会がそれまでに有していたゲマインシャフト（共同体）的性格の崩壊を一層早めることになった。地域社会住民の相互の連帯感、融和感が薄れ、孤立化が進んだ。他人との社会的な結合の仕方に関して、ゲマインシャフトに特徴的な〈親〉の結合よりも、ゲゼルシャフトに特徴的な〈疎〉の結合を志向する性向が増大した。

〈親〉の結合から〈疎〉の結合へ転換をはかるためには、言語行動も〈親〉の言語行動から〈疎〉の言語行動へ転換させなければならない。〈疎〉の言語行動とは要するに相手に近づかず、相手を近づけず、相手を隔て、相手との間に距離を置き、相手に対して構える言語行動である。しかも、それらの言語行動には、社交的礼儀の常として品位をともなう必要がある。そのためにもっとも効果的なのは、ていねいな敬語形式を使うことである。

つまり現代社会の日本人は、相互尊敬（尊重）という標準によって相互にていねいな敬語形式を使うようになったし、

〈疎〉の社会結合という標準によっても相互にていねいな敬語形式を使うようになったのである。

産業化・都市化の進展にともない、個人的な親しいつきあいは極度に制限され、見ず知らずの相手に対しては、当たり障りのないように、また必要以上の警戒心をもって、幾分過剰気味の敬語表現をする。金銭上の利害関係をともなう場合には、つまり商売上のことばづかいでは、だれだかわからない個人に対して、目上は当然のこと、同輩・目下・子供にまで非常にていねいなことばづかいをするのが、現代社会での敬語表現の特徴であるといえる。つまり、日本社会の構造変化の結果として、現代日本語はある限られた部分では必要以上にていねい化する傾向にある。

喧嘩の際には、暴力で訴えるようなことはまれで、むしろ暴力以上の力を発揮することばを武器に冷淡に応戦する。依頼ごとや断りの際にも敬語表現は威力を発揮する。波風を立てずに紳士的に社会生活を営むための方策として、敬語表現はなくてはならない存在である。

若者が友だち同士の間で取り交わす乱暴なことばづかいは、連帯意識の確認のためであり、希薄な人間関係のもとに表面上平穏に営まれる大人社会に対する反動ででもあるように見える。

「尊敬してもいない人に敬語を使うのはそらぞらしくて嫌だ」と学生はよく言う。「敬語」のもつ距離感に敏感な若者は、親しさの感じられないことばづかいには心理的に嫌悪感をもつのだろう。目上の者には敬語を使わなければと思う一方で、よそよそしくなることを恐れて性急に親しさを求めようとするのかもしれない。初めは敬語を使っていても、続けて使い続けることには抵抗があるようだ。「敬語表現」のバラエティーを理解し、自分でも活用できるようになれば、このあたりの若者の抵抗感はかなり和らぐだろうが、知識のなさに加えて、経験不足からくる自信の無さが、ますます敬語を若者から遠ざけてしまうようだ。

かつて「敬語」が、「言海」で「敬ヒテ称スル語」と解説され、また、「日本文学大辞典」で小林好日博士によって「人を敬ひ己を謙る心持ちの言語に現れたもの」と解説された時代は、遙か昔となった。現在の敬語表現の機能は、社会構造の変化にともなって複雑多岐にわたっている。

四　使い分けの問題点

1　待遇表現の中の敬語表現

「敬語」を文字通り「敬意を表すことば」と解釈していたのでは、現在の日本の社会での「敬語」の働きを十分に理解できないことはすでに述べたとおりである。現代敬語は、敬意を表す語と言うよりもむしろ人間関係を円滑に保つための「社交語」としての側面を強くもつ。敬語使用に際して、かつては年齢や社会的地位というどちらかといえば客観的な判断基準が役に立ったが、現在では、むしろ力関係、恩恵関係、親疎関係といった、きわめて個人的かつ心理的な要因が判断基準として必要になる。

敬語を使う場合の対人関係として、辻村敏樹は次のようなものを挙げている。（注5）

（1）対人関係の条件

（一）上下関係

①同一組織内の地位

②社会階層

③年齢
④経歴の長短
(二) 恩恵・負い目の関係
(三) 力関係
(四) 親疎関係
(付) 対女性の関係
(2) 場面的条件
(一) 公的場面
(二) 間接的場面
付 「自己指向の敬語」
(一) 品格保持の敬語
(二) 自敬表現

本来の敬語表現が敬意を主体にしたものであったことは事実であろうが、現在では上記のようないくつもの要因がくみ合わさって、その場その場の状況に合わせた敬語表現を用いている。

敬語成立の条件は「対人関係の条件」、「場面的条件」ともに言語主体に対して非常に改まった表現を要求するものであり、言い換えれば、親しさや気楽さの対局にあるものとして位置づけられる表現であることも事実である。敬語表現はつまりは、隔てを置き、疎遠な関係を示すことによって言語主体の畏敬の念を示すものなのである。

誰にどのように使ってよいかわからないので、とにかくものいいを全てていねいにしようとして、尊敬語、謙譲語、丁寧語を全て無配慮に使ってしまう学生のやり方では、自分自身に対して敬意を示すことばづかいをしてしまう失敗を犯しかねない。

敬語表現を含む待遇表現の難しさは、語形そのものの変化にだけあるのではなく、むしろその場その場の対人関係に応じて表現を適切に使い分けなければならない点にある。その意味でも、おのおのの表現はそれぞれの場面を十分考慮しながら考察することが敬語表現の理解を促進することにつながる。

敬語表現を、一連の待遇表現の一角をなすものとしてしっかりと認識したい。普通（対等）の言い方を基準にしてぞんざいな（軽卑）表現の対局に敬語表現を位置づける。ぞんざいなことばや対等なことばづかいがあるからこそ敬語が敬語としての表現効果を持つのである。

教室で敬語表現の練習を行うときには、一連の待遇表現をセットにして考えることにしている。

ある女子学生は、コンパで顧問の先生から酒を勧められて、

「申し訳ございません。わたくし、いただけないんです」

と断り、友人のしつこい勧めに対しては、

「飲めないのよ」

「飲めないから、だめ！」

「うるせえなあ、飲めないって言ってんだろう。しつこくすんなよなあ」

と、段階をおって拒絶した話をしてくれた。

「ぼくがしておくから安心して下さい」という会話を考える場合には、もしもこれが会社での上司に対してのものであるならば、「ぼく」を「わたくし」にかえ、「しておく」を「いたしておきます」にかえ、「安心してください」は「御安心ください」となるだろう。また日ごろ心置きなく親しくつきあっている友だちに対してならば、「ぼくがやっておくから安心しろよ」という程度のぞんざいさがあった方が、相手に負担を感じさせないことにもなる。

学生が、日ごろ使っていることばを足がかりに、時と場合による使い分けのバリエイションを示しながら学習を進めれば、敬語の表現はそれほどやっかいなものではなくなるはずだ。

2　敬語の分類と問題点

敬語は普通「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」というように三分類される。学生も、この三分類法についてはある程度の知識を持っているので、この分類法をそのまま使いながら問題となる部分を考えてみたい。

イ　尊敬語

尊敬語が敬語の三分類の中の一つであるということが理解できずに、敬語と同義語として理解してしまっている学生が多い。確かに考えようによっては、以下の謙譲語や丁寧語も結果的には誰かに対する敬意の表現であることには変わりないので、分類上の命名が学習者の混乱を招いているとも考えられる。

尊敬語の敬意の対象は話題の人物の動作や状態である。

例　いらっしゃる　おっしゃる　なさる　お・・になる

敬意の対象になる主体の動作や状態が他者に恩恵的に働く場合には、関係概念を内包する次のような尊敬語が使われる。

例　下さる　お誘いくださる

いずれにせよ、尊敬語を用いる場合の動作や状態の主体になる人物は、敬意の対象になる人物であることを確認しなければならない。

「お・・になる」については、謙譲語の「お・・する」との混同をしないように特に注意したい。次のロで示す謙譲表現の「お・・する」は「お」がついていることによって、若者は尊敬語と誤って使用することが多いが、敬語の機能に期待して主語を省略する傾向にある日本語の場合、この誤りは、コミュニケーション上、誤解を引き起こす要因になる危険性が大きい。次のような場合である。

アルバイト先の百貨店で、配送品の宛先の住所を客に書いてもらうか、店員である自分が書くかという状況で、

「住所をお書きしますか」といえば自分が代わりに書くことであり、「お書きになりますか」といえば、客本人に書いてもらうことである。ペンを客に向かって差し出しながら、「ご自分でお書きしますか？」と言って待っていたのでは、客が当惑するばかりである。

ロ　謙譲語

学生がもっとも苦手とする敬語である。謙譲語に相当する単語そのものが知識として全くない場合も多いが、聞きかじった謙譲語を尊敬語として用いる間違いが多い。「謙譲」のことばの意味（へりくだる）が現代の若者に理解されないことが、謙譲語そのものの理解の妨げにつながっていることは容易に推測できる。

謙譲語は、動作、状態の主体を低め、へりくだる言い方である。多く表現主体または表現主体に近い関係にある人物について用いられる。

例　いたす　まいる　お・・する

他者との恩恵的関係概念を内包する謙譲語には次のようなものがある。

例　いただく　さしあげる　見ていただく　もってさしあげる
　　たまわる

尊敬語の場合にその動作や状態の主体の確認をおこなったのと同様に、謙譲語の場合には、敬意を示したい対象からみて、へりくだる立場にある者の動作や状態を示すことばであることをしっかりと確認しなければならない。

学生が、謙譲語を尊敬語と取り違えて使用することが多いと書いたが、これは、一般での使われ方にも影響を受けていると考えられる。

例えば、テレビで時代劇を見たり落語や講談を聞いていると、

「貴殿の名前はなんと申される」

「貴殿の申されることは合点がいかぬ」

など、武士階級の用いた、自らのものいいを荘重にするための表現のようなものがある。これらには謙譲語としての機能はない。

現在でも「申される」というふうな、いわゆる謙譲語の「申す」を尊敬語の形にして使用する例がひんぱんに聞かれるが、謙譲語の誤った使い方というよりも、かつての使われ方の影響が残っているとも考えられるだろう。

また、「申し出る」「申し込む」などの「申す」にも同じようなことが考えられる。「お申し出ください」「お申し込みください」なども、丁重な表現としてそのまま残っている。

ハ　丁寧語

イの丁寧語、ロの謙譲語とはまったく性質を異にする敬語である。動作・状態の主体を高めるとか低めるとかいった配慮は全くなく、もっぱら表現を受容する側、つまり聞き手に対する改まった気持ちを直接的に表わす敬語である。

例　です　ます　でございます

尊敬語や謙譲語に理解がおよばない学生は、敬語といえばとにかく文末をていねいに、つまり「です」「ます」をつけ、単語に「お」をつけてしのごうとする。

尊敬語と敬語との混同と同様に、丁寧語とていねいな表現との間に混同が見られるようである。寿司や飯がお寿司やご飯になるのもていねいなことばづかいと言うし、敬語表現全てをていねいな表現ととらえることもある。

敬語の三分類法の中での丁寧語はあくまでも話す際に相手（聞き手）があって、もっぱらその聞き手指向で用いられる表現であることをしっかりと認識したい。

辻村敏樹（注6）は丁寧語に関して次のように述べている。

・・・「お天気」や「ご飯」ということばが、「きょうはいいお天気だなあ」とか「おいしいご飯を食べたっけ」のように独白や心中思惟にも用いられるのに対し、「です」「ます」は、それを用いて「今日はいいお天気ですね」とか「おいしいご飯を食べました」のようにいうと相手があってはじめて用いられる表現となり、独白や心中思惟には決して用いられない点、全く性質を異にする。

辻村は同論文で、外国人に日本語を教える際に、この違いを明らかにしなければならないと強調している。つまり、「です」「ます」は心中思惟には用いられないので、「と思います」とか「と考えます」といった表現の前には用いられないと説明するのである。

例

・フランス人は、子供に対するしつけが、日本人よりも厳しいですと思います。

・日本は、オリンピックに参加しますかしませんか迷っていま

す。

敬語表現に慣れない日本人の若者の中には、外国人の日本語学習者と変わりのない誤りを犯すものも多い。逆に外国人の方が、尊敬語や謙譲語に関してはきちっとした学習の積み重ねの中で語彙を蓄積しているので、正確な敬語表現を行う。

いずれにしても、尊敬語と謙譲語とが、話題の人物や事物に対する敬語であるのにたいして、丁寧語は聞き手に対して直接的に敬意を表す敬語であることをしっかりと区別したい。

例

・犬が来る。

・犬が来ます。（聞き手を意識しての「ます」）

・先生が見える。（「見える」は先生に対する尊敬語）

・先生が見えます。（「ます」は「見える」先生に対する敬語ではなく、聞き手に対する敬語）

・「先生も、見えますか？」（その先生が聞き手である場合は、「ます」も「見える」同様おなじ先生に対する敬語である）

現在の若者が敬語を使うのは、聞き手が目上の人であったり初対面の人であったりして、聞き手をていねいに待遇しようとする場合が大部分であるので、丁寧語は、尊敬語や謙譲語と常に同時に使われることになる。尊敬語や謙譲語の知識がない場合は、とりあえずは「です」「ます」だけで敬語を代表してしまうことになるのだが、直接目の前にいる聞き手を意識して丁寧語を使うという若者の感覚は、丁寧語の働きから考えれば間違っていないと言える。

その際に、話題の対象になっている人物が、聞き手よりも目下で話し手の若者と同等かさらに目下である場合には「です」「ます」だけでも問題はないが、話題が聞き手に関することであったり、聞き手よりもさらに目上か、話し手が当然敬意を評すべき人物（恩師など）の場合には、その話題の人物に対しては尊敬語を、話し手自身に対しては謙譲語を使いながら、なおかつ文末で聞き手に対しては「です」「ます」を使うことが要求されるのである。

ニ　美化語

イ、ロ、ハの敬語が全て他への敬意を示す表現であるのに対して、美化語は自らのことばづかいを美しくし、それによって自身の品格を保とうとする自己指向的な敬語表現であるといえる。とりわけ、女性に顕著に用いられる表現であるところから、女性語と呼ばれることもある。

自己の人格保持のための用法で、他者に対するものでないならば敬語表現の枠からはみ出るのではと考えられなくもないが、自己の品格の保持は、詰まるところ他者を意識しておこなうものであると考えるならば、敬語表現の中に含まれると考えてもよいであろう。

例　おなか　お菓子　いただく　おやつ　おいも

「お電話」や「お手紙」、「お相手」といった場合の「お」については美化語として用いられる以外に、相手に関わる物事としてとらえ、尊敬語か謙譲語のいずれかに分類できる場合が多い。

最近、問題として取り上げられることの多い敬語に謙譲語の「あげる」がある。本来は、敬意を評すべき人物に対して、話し手（行為の主体）が「与える」「やる」といった行為をする場合のへりくだった表現として使われる謙譲語であるが、現在では次のようなものいいがごく普通におこなわれている。

・「ポチに餌をあげて」

・子供におもちゃを買ってあげる。

この際の「あげる」にはなんら謙譲の意識はない。「餌をやる」、「買ってやる」ではなんだからんぼうな感じがするので、「あげる」を使うというのが本当のところだろう。

こうなると、「先生に記念品をあげる」では、やはり普段から使い過ぎていて失礼な気がするので、「先生に記念品を差し上げる」というように、さらに敬意の強い謙譲語「差し上げる」を使うようになっている。

現在では、「あげる」を謙譲語と認識するのはかなり難しい状況である。もっともこれは、もとの「与える」や「やる」といった単語の意味そのものが、恩恵的であることも関与している。

また、「食べる」を「食う」の美化語であると認識することがほとんどないことと並行して、「いただく」を美化語として用いることも進んでいる。

3　相対敬語

敬語の使い分けが、いくつかの条件によって左右され、使い分けの難しさがあることは分析できたが、ここでさらに学生を戸惑わせる日本語の敬語の大きな特徴がある。

それは、ある一人の人に対して通用した尊敬語が、他の話題の人物や聞き手の登場により、そのままでは使えなくなる場合である。その人の相対的な立場が変化すれば、使用する敬語も変わるのである。尊敬語を使う対象になる立場であった人が、自分と同じ謙譲語の対象になることもあり得る。

例

・「社長、今どちらにいらっしゃるのですか？」

・「社長はただいま、東京の支店の方に参っておりまして留守にしております」

初めの例は、直接社長に話しかける場合。当然尊敬語が使われている。次の例は、社外の人物に対して、自社の社長を謙譲的に表現する例である。これと同様の例は、自分の家族に言及する場合にも起こる。

会話場面において、話し手、聞き手、話題の人物の相対的関係に応じて、それぞれに使われる敬語の種類が変化するのが相対敬語である。

敬語表現の難しさは、既述の分類ごとの違いを理解することに加えて、相対敬語として、場面、場面で、瞬間的にしかも正確に人間関係を把握しなければならない点にある。

五　敬語表現の指導を考える

1　家庭・学校・社会

かつての日本の社会では、家長や学校の先生は敬語表現の対象になる存在であった。ところが、現在では、親しさの意識が優先され、家庭はもとより、学校でさえ敬語表現はほとんど消えてしまった感がある。

「我が家の敬語」と題して書いた学生の作文を紹介しよう。(注7)

・我が家は七人家族である。だから敬語はよく使われる。おじいちゃんに対しては「おじいちゃん、・・・はどうですか」など、はっきりした敬語を使う場合が多い。ところが、おばあちゃんにたいしては「おばあちゃん、・・はどう？」と、敬語を使わないときが多い。これには、二人の性格の違いがでていると思う。親

しみが深い人には敬語は使わない。おじいちゃんは頑固なのである。そういうわけで、敬語はおじいちゃんだけに発せられる。

・私自身、家で敬語を使うことはまずない。今こうやって課題にでるまで思いもつかなかった。なぜだろう。それはたぶん、家族間で敬語を使うことで、他人行儀になり、コミュニケーションが取りにくくなるからだろう。たとえば、祖父は父に対して敬語を使っている。父が婿養子であることが影響していると思う。しかし血がつながっていないからこそもっとコミュニケーションを図るために敬語をなるべく使わない方がいいと思う。

・我が家には敬語なんてものはない。使わないので、いざというときに使えない。我が家で敬語が聞けるときは、外から電話の時だけ。母などは声までかえて、いつもは話さないことばをしゃべる。全然似合わない。我が家にとって敬語は英語みたいなものだ。

・私の家で使われる敬語で一番最初に思いつくのは、母が祖父・祖母に対して使う敬語である。敬語を使うといっても、ごく日常的に使用することばで、それほどていねいな敬語というわけではもちろんない。我が家で使われている敬語の中で思いつくものはそれだけで、他の家族の間では、敬語を使うようなことは全くないと言っていい。私は思うのだが、家族の間で敬語が使われるような家庭があったら、それはとてもぎこちないものになるだろう。祖父母に対してだけかろうじて家庭内の敬語が残っている。親子の間で敬語を使うことは、親しさのない不自然なものとして否定的に受け取られている。

学校（小・中・高）教育の場では、教育効果を求めて教師に対する敬語表現が消えて久しい。そんな中で、子供たちは、小学校の中学年あたりから、先輩や後輩といったことばとともに、サークルやクラブ活動を通じて敬語表現に触れる。しかし、きちんとした知識を持たないまま、先輩の模倣をくり返すだけで、むしろ敬語に対する不安感が増すようである。

国語の教師は、ことばの教育を行う責任を放棄し、学校では全くといってよいほどにことばのけじめが失われてしまっているように見える。

生活の大部分の時間を学校で過ごす子供たちのことを考慮に入れて、教師同士のことばづかい、訪問者へのことばづかい、校長、教頭への他の教師のことばづかいといったものを学校の場で再確認してはどうだろう。小学校ではまだしも、中学や高校での教師の言葉づかいのひどさは、生徒に影響されてか、保護者が参観や懇談に訪れたときには、一般社会との落差に、気分が悪くなるほどである。生徒と教師の間に、ある程度の親しさが大切なことは理解できるが、生徒同士で使うことばを教師も使わなければならないものだろうか。疑問である。

学校では、子供の側というよりもむしろ教師の方が子供サイドに下りることによって、互いの間の垣根を取り払い、教育的効果を上げようと考えているようである。授業参観や懇談会で保護者が学校を訪れた際には、教師と子供とのまるで友達同士のようなことばづかいに、親の方が違和感と疎外感を抱いてしまう。

子供達は、学校で、他人の目上の人に対することばづかいを学ぶ機会を全く失ってしまっている。就職して、社会人になってから、企業で初めて大人社会のことばづかいを学ぶのである。

大学の場合は、学生を一人前の大人とみなして扱うので、むしろ学生たちは、敬語で話しかけられる快い緊張感を感じとっているよ

うだ。一人前のことばがけをされれば、自身もそのようにしなければと感じるのだろう。年輩の教授からていねいなことばがけをされて戸惑いながらも、大学生になった自分を実感したと感想を書く学生も多い。大学の場合は、教師と学習者の間に距離があることが、敬語の使用につながっている。

学校教育の現場には敬語教育は任せられないとばかりに、今では企業が新入社員のことばづかいの研修を行う時代である。

ことばの使い手として、子供たちの模範であるべき教師、とりわけ国語の教師が敬語を教えられないのは問題である。また、小・中・高・大といった、教育現場に働くものたちは、教師はもちろんのこと、よりいっそうことばづかいに慎重になるべきであろう。入学ガイダンスや進学セミナーといった場で、成人教職員が平気で間違った敬語をマイクを通して学生に送り込むさまを見ていると、経済効率優先で、何事も企業に牛耳られてしまう日本の社会の構造が目に見えるようで恐ろしい。企業人になってから流ちょうな話し手に育つであろうことは否定しないが、知識の整理と率先垂範は学校現場で行って当然のことであろう。

2　今後の指導のために

親しさをともなう敬意の表現について、野村美穂子が『聞き手が敬意の受け手である場合の「丁寧体を伴わない尊敬・謙譲体」』（注8）で次のようなものを紹介している。

・「なんだかこのごろいつもそれを悩んでいらしゃらない？」
・「もう召し上がった？」
・「ええ、いただいたわ」
・「それを、まずお聞きしたい」

聞き手に対する敬意を失わない程度に、親しさの気持ちも表現したいと思うことはよくあることである。ここで紹介されているような表現は、日常的にかなりよく使用されているように思う。

ここで詳細を考察することは省くが、若者が重視する親しさを伴った敬語表現というものが、若者がこれを使えば敬語表現になるだろうと考えている丁寧語、「です」「ます」を伴わない尊敬語・謙譲語だけの使用によっておこなわれているという事実が問題点である。

商業や営業用の敬語表現を学校で指導する必要はない。それは、仕事上の道具として、企業が教えるのが当然である。家庭や学校では、さまざまな人とのつきあいの中で、自らの思いを素直に示せる日本語を教えたい。家庭は家庭なりに、学校は学校なりに、それぞれの学習環境の中で、場面に応じたことばの使い分けが学べる。

家庭にはおのおのの家庭独特のことばづかいがあるのは当然であり、家族間のコミュニケーションがそれによってスムーズにはかれるのであればなんの問題もない。そこにひとたび第三者が現れたときに敬語表現の問題がでてくるのである。来客や電話の受け継ぎなどを通して子供は外の社会でのことばの使い方を学ぶ。そしてその際の指導者は、外の社会での人生経験の長い親や年長の兄弟であろう。

学校は、子供が家庭を離れて初めて接する外の世界である。家庭でのことばづかいからほど遠くて、全くなじめない世界であっても困るが、親兄弟や遊び友だちと同じレベルであるなら、ことばの習得においては学校は何の役にも立たない場になってしまう。校長、教頭、担任教師、それぞれに対することばづかいは、同年齢の友だち同士で使うことばとは違って当然である。教師間には教師間のこ

とばづかいというものがあろうし、そうすることが子供にことばを教えるきっかけにもなる。

ここでもう一つ、方言と敬語との関連も押さえておきたいポイントである。家庭も学校も、地域との密接なつながりをもっている。ある学生（注7）が、敬語に関する作文の中で次のように書いている。

・年上の人と話しているとき、方言がでてしまい困ったことがある。例えば「強く」というのは「げいに」というので「そんなげいに押すと壊れてしまうのではないでしょうか？」と終わりに敬語を使ってもさまにならない。その方言が理解できる人ならいいのだけれど、知らない人だったら失礼に当たってしまう。目上の人と話すときに、方言を使わないようにして正しい敬語を使おうと力みすぎると緊張してしまい苦痛である。

はたして、ここで学生が書くように、方言は敬語表現の中で使うにはふさわしくない失礼な表現であろうか。それはまったく否である。地域の生活語である方言は、各地の文化や生活習慣をになう重要な言語であり、失礼な表現であることは決してない。もちろん、異なる地域の住民にとって意味が理解できないことは事実であろう。理解できないことを承知で意識的に方言を交えることを、失礼というとするならば、ある面では正しい。が、それが無意識におこなわれたものであるならば、質問を受けた時点で意味を説明すればすむことではないだろうか。

学校教育で方言教育が行き渡り、自らの出身地のことばを恥じたり卑下したりする学生はまれになった。むしろ、ここ数年は方言を大事にしたいとする積極的な姿勢を見せる学生がほとんどである。

方言が敬語表現にそぐわないとする意識は、上辺だけの方言教育で、方言の本質というところまで教育が行き渡っていないことを実感させる。方言には方言の敬語表現が存在する。方言の中にも、きちんと敬語表現がある。（もっとも敬語表現のない方言もあるらしいが。）

方言は失礼なことばづかいであるという考え方は、方言は恥ずかしいという、かつて日本で標準語政策が強行された時代に培われた意識につながるものでもある。このあたりのことはきちんと説明すべきであろう。

「親しき中にも礼儀あり」ということばは大事にしたい。それがないと若者をしかる前に、大人がそれをしているかを考えなければならない。何事も「けじめ」は大切だ。若者が拒絶反応を覚えるような敬語表現でなく、学生が指摘するように、その場その場で気持ちよく使い分けのできる、おしゃれな敬語表現をこれからの社会のためにも考えて行きたい。

六　おわりに

敬語表現指導は、本短大の「国語」や「国文法」の受講生からの要望に応じるかたちで始めた。具体的な敬語表現に即して、学生の理解しづらい部分を分析するつもりで稿を起こしたが、結果的には、敬語表現の現状の把握といくつかの問題点の掘り出しまでで字数がつきた。残されたいくつかの課題については次回につなぎたい。

日々の生活の中で、指導者本人にとっても身近で、しかも難しい敬語表現である。国語教師として、今後も、自らの敬語表現能力を高める努力をすると同時に、若者の期待に応えられる敬語表現の指導法を探って行きたい。

注

1　本論文中に引用した学生の作文は、上田女子短期大学の「国語」・「国文法」の受講生、および長野大学の「国語」の受講生が、「敬語表現」に関する学習をした際に提出したものである。

2　タメ口・・親しい友だち同士の間で使われる、ぞんざいとも言えることばづかい。

3　田中章夫　昭和四十四年「敬語論議はなぜ起きる」『言語生活』

4　渡辺友左　昭和六十一年「社会変化と敬語行動の標準」国立国語研究所報告八十六

ここでの引用は、一九八九年『国文学解釈と鑑賞』七月号所収の、同じく渡辺友左著「敬語・差別語」からおこなった。

5　辻村敏樹　一九七七年「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語4　敬語』岩波書店所収

6　辻村敏樹　一九八九年「待遇表現（特に敬語）と日本語教育」『日本語教育』六十九号

7　長野大学平成四年度の「国語」の受講生の作文より

8　野村美穂子　一九九三年「聞き手が敬意の受け手である場合の『丁寧語を伴わない尊敬・謙譲体』」『日本語教育』八十一号

参考文献

・北原保雄編　一九七八年「論集日本語研究9　敬語」有精堂出版

・一九七七年「岩波講座　日本語4　敬語」　岩波書店

・南不二男　一九七四年「現代日本語の構造」　大修館書店

・野元菊雄　一九八七年「敬語を使いこなす」　講談社現代新書